假名源流考上欄見出索引

上欄見出索引

ア之部

英智王（アチ） 二七五
阿智使主の事蹟 二七二
阿智使主一黨類が魏晉の音の傳播 二七二
阿智使主一族歸化の情況 二七七

イ、ヰ之部

イ韻の文字を、ア韻に呼ぶことは、東漢に至りて絶えたる證 二五一
イ韻の文字を、オ韻に充てたる假名に對する編者が最初の考 一二六
石寸（イハレノ）神前宮 四四
遺文（推古期）中に、ア韻の假名に用ゐられたる奇宜侈移の、詩易楚辭の古韻中の阿可多等と共に用ゐられたるもの 一一三
遺文と假名の研究との關係 二三
遺文の取捨 二四
遺文の特徴 七八
遺文の傍訓につきて著者の所見 二九
韻鏡效攝の文字をオ韻の音に充てたる例 一八七
韻鏡效攝文字の詩易の韻例 一八九
韻鏡に對する從來の誤見 二〇三
韻の異なる文字の一韻となれるによりて音尾のイなることを知る 一六七
伊豫道後溫湯碑文 二五
委奴國王の印の發掘 一〇

ウ之部

厩戸皇子薨日の二十二日と五日と兩說の起れる理由 五七

エ、ヱ之部

惠慈法師の死日は、五日なり 五六
英寧を、ア ナに充てたる例 九一

オ、ヲ之部

意（オ） 一一五
乎（ヲ） 二二六
王辰爾、高麗の表疏を讀む 二三四
オク韻甲乙二類の入聲と平上去との文母の關係 一五六
オク韻文字の甲乙二類 一三八
意富（オホ）の詩經押韻例 一二七
意富（オホ）等の韻に對する古韻家の考 一二八
音尾は最も永遠に傳はるべし 一六八

カ之部

奇（カ） 一〇二
宜（カ） 一〇二
假名にかける遺文の名稱 七九
假名の古音を永遠に傳ふべき理由 二六三
鬼前（カミサキ）大后 四三
鬼前大后を、魄（ツイタチ）、前大（サキノ）后と讀むべき說の論 四三

漢魏のイの音尾の實例　一六八
漢魏の譯經時代には、第三類の文字は、既にイ韻に轉じたり　一七〇
漢魏兩晉音の傳來　二六八
漢吳音のイウヰの韻をオ韻に充てたる例　一三四
漢字渡來に關する史冊上の記事　三
漢字の渡來、阿直岐王仁來朝以前に在り　五
韓地に、夙に漢字の行はれし事實　二六三

キ之部

吉キ支キ　二〇五
奇をカに充てたる例　三三
宜を、ガに充てたる例　二〇二
義宜尼彌等を、エ韻の音に充つるは漢魏兩晉の音なるべきこと　二〇二
と　二六八
吉を、キに充てたるは入聲音尾を、省きたるものなり　二〇七
吉字を、キの單音に充てたる古韓音の例　二〇五
木村博士の王仁が獻れる千字文は魏の鍾繇が作れるものなる確論　二七一
居ケ擧ケ義グ　一七九
研究の多難　二
研究の端緒　三

ク之部

久波多ノ女王　一七九
元興寺丈六光背銘　三六
元興寺露盤銘　三〇

ケ之部

コ之部

己コ　二一六
高勾麗の國初、既に百卷の書あり。それより三百年の後の百濟に文字無し。是信ずべからず　一三
高勾麗の始祖の時、既に一百卷の留記あり　一四
巷字を、ソ音に充てたるにつきての諸說　二三一
工人の名稱　三四
效攝文字、古音の推定　二〇一
效攝文字、古今の音例　一九八
匣母の文字を、ワ行の音に呼ぶことのガ行に呼ぶよりも古きこと　二三〇
古音舌頭舌上の分無き說　九二
吳音にゴゲヱ等と呼ぶ文字を、ヲヱ等の音に充てたる例　二三七
後漢書獻帝紀　二七六
後漢譯音に支字をチの音に充つ。

支字をキと呼びしは、前漢以上なる證なり　二三五
國記の船史等の手に成れる證　二三七
乎會賀戸等の後漢以後の變遷　二三八
乎後を、共にヲと呼べる例　二三七
古今文獻上の字音の淆雜せる狀態　一
古詩文、押韻の必要ありし所以　一六六
此篇の目的　一
古文獻中に於て、周代古音を發見せるにつきての所感　二三三
古文法　六八

サ之部

坂上系圖　二七三
三枝王　七〇
三枝王は三ツ子なり　七七
坂上忌寸苅田麿上表　二七四
古韻家の思へる止蟹流三攝の音　一四九

シ之部

詩易の韻脚、效攝文字につきての新事實　一九六
支を、キに充つるは、古音なる說　二三三
字音の韻、體韻、音尾の別　一六七
詩經イ韻押用字數比較圖　一五一
詩經韻脚イ韻押用例　一四〇
詩經韻脚オク韻押用例　一三三
周代古音、周秦の間に入る　二五三
周代古音傳來の時代を尋ぬる順序　二三四
周代古書押韻中の奇宜移等の文字　一〇七
周代に於ては此の第三類の音は、オイ韻なりしならんといふ推斷　一七一
壽國　二八
繡帳の銘使字の位置　五八
周代古音漢以後の變遷　二四二
繡帳銘二十一日の一は衍字なり　五一
繡帳銘文皇前曰啓の脫落　五七
周末漢人の韓地に入るもの多し　一四
上宮記逸文　六四
上宮記所載の書　六六
上宮記の作者　七四
周秦の間、齊人の、東方に入るもの多かりし所以　二五九
同じく、燕人の、多く東方に入るべき所以　二六〇
同じく、趙人の、多く東方に來るべき所以　二六一
周代古音、周秦の間に入る　二五三
周代古音傳來の時代を尋ぬる順序　二三四
周代古書押韻中の奇宜移等の文字　一〇七
周代に於ては此の第三類の音は、オイ韻なりしならんといふ推斷　一七一
壽國　二八
繡帳の銘使字の位置　五八
周代古音漢以後の變遷　二四二
繡帳銘二十一日の一は衍字なり　五一
繡帳銘文皇前曰啓の脫落　五七
周末漢人の韓地に入るもの多し　一四
上宮記逸文　六四
上宮記所載の書　六六
上宮記の作者　七四

上宮記の性質　六六
上宮太子系譜　六九
上古記錄ありし記事　二
上古我が國と漢土との交通の狀態　九
辰智の古音同音なりしこと　二四〇
神功皇后、征韓以前に於ける三韓との交通頻繁なりし狀況　七
秦民歸化の情況　二五四

ス之部

推古期遺文の多かる所以　三
推古期遺文の假名の分類　八三
推古期遺文の蒐集　三三
推古期遺文の筆者　二三四
推古期の異體の漢字　一二
推古天皇の御宇、修史の情況　三三
菅野眞道等の上表　三八
足（スク）　二〇四
崇神天皇以來、開化の程度　六
崇峻天皇四年を、法興元年とせられし所以　二

セ之部

川字を、ッに充つるは、周代古音より出でたる證　二三〇
川字を、ッの音に充つるにつきての從來の諸說　二二九
船文兩史の所傳字音の同一　三九
全篇の概括　二七八

ソ之部

嗽　一八四
僧惠總　二八
相宕等を、サガ　タギに充てたる例　一四
嗽加大臣　一八四
蘇我のソガ、スガ相通じたる韻　二五三
其の一、箕子朝鮮の遠裔　二五三
其の二、秦の亡民　二五八
其の三、齊燕趙の亡命人　二五四

タ之部

其の梵音譯字の實證　二六九
侈（タ）　二五四
第一類　二〇七
第一遺文の出處　九〇
大王天皇　二六
第九遺文の出所　三五
第九類　七四
第五章概括　二〇四
太古漢字有りし說と語部との關係　一九
太古に夙に文字ありし推斷　二〇
第五類　一七八
第五類の概括　一八〇
第三遺文の文體　三六
第三類　一二四
第三類の文字の詩經時代に於てオの韻なりし諸事實の契合　一六三
第三類の文字は、周代古音はオイ

韻なりしといふ斷定　一七二
第四遺文の出處　三八
代字をテト讀むべき所以　一七五
第七類　一八四
第十一類　二〇七
第十五類　三二六
第十三類　二一六
第十四類　二三三
第十二類　二〇九
第十類　二〇五
第十六類　二三〇
第四類　一七二
第四類の概括　一七七
第二遺文の出處　三三
第二　文の文體　一〇一
第二類　一七五
第二類の文字を、一韻とせる詩易　一〇
楚辭の韻脚　一〇九
第八類　一八六
田村氏系圖　二七五

第六遺文の出處　四九
同じく由來　四九
第六類　一八二

チ之部　二七
至（チ）　六三
朝風文將其零濟師慧燈の難讀　二三
通韻叶韻の說我が國の實例により　二三
て初めて破る
情況　一五
代（テ）　一〇
帝王本紀中の古字　一七
帝王本紀の古字は、固有の文字な　三
るべき說
帝王本紀の古字は、固有の文字に　二
あらず
天壽國をトコトハノミクニと訓じ　四
たる理由
天壽國の諸說　四九
天壽國は、忉利天の妙喜國なり　一八二
天壽國曼荼羅繡帳銘　四六

ト之部　一七
刀（ト）　六三
止（ト）　五九
止侈　六二
東方に入りたる漢人の文字使用の　四六
情況
東方に漢字傳播すべき事情　一八
止は音假名なり　一二六

ナ之部　一七
難　二〇七
浪速を、後に難波とせし理由　二〇八
難字は、ナンと呼びて難波はナニ　二〇八
ハと讀むべし

ニ之部

日本書紀、厩戸皇子薨去の年と日との誤謬ある所以　五三

ヌ之部

蕤(ヌ)　一八三

蕤の用例　一八三

ヌの音尾を、ナニヌネノに自在に轉用せし所以　二〇九

ネ之部

尼(ネ)　一七四

ノ之部

乃(ノ)　一三三

ヒ之部

卑彌乎の彌の呼法　一七六

フ之部

風心林等の古音の、ウレ韻なること　二四

弗念干食の讀法　四五

船氏の出自　二三八

船氏墓誌　二三五

船氏墓誌銅牌現時の所在　二三五

船惠尺、國史に對する偉勳　二三七

船史一族の任用　二三五

船史王平の行蹟　二三六

文氏の出自　二四〇

文忌寸最弟等の上表　二四〇

ヘ之部

俾(ヘ)　一三三

編者が、意富の古韻研究の次第　一三七

ホ之部

凡(ホ)　二一〇

富(ホ)　二一六

法王帝說　四九

法興元を、一年號と見る說の可否　四二

法興元世の世は、卅と讀むべし　四〇

法興元の讀法　四二

法興元年は、崇峻天皇四年なり　四一

法興といふ年號　二七

法隆寺金堂釋迦佛光背銘　三九

法隆寺三尊佛光背銘　六三

法隆寺金堂藥師光背銘　三四

マ之部

前田侯爵家所藏釋日本紀は、作者手寫の眞本なり　二七

ミ之部

ミヤウリヤウ等のウは(ng)なること　九二

ム之部

ム音尾の文字の、詩經韻脚の分類　二一

牟義都國造
メ之部
明をマに充てたる例　一七三
明字をマに充てたる唐時の例　九一
モ之部
母々恩己につきての考　一〇〇
ヤ之部
移ヤ　六六
移をイの音に充つるは、天平の末以後なり　一〇三
移をヤに充てたる例　一〇六
移に、ヨの音ありといふ説、信ずべからず　一〇三
大和の和字は、委若しくは倭なるべし　一〇五
ヨ之部
已ヨ　三三
リ之部
利をリに充てたる例　一〇三
里を、ロに充てたる證明　一二八
里と利の分用　一二九
レ之部
禮レ　一三三
ロ之部
里ロ　一七五
露盤の成れる年數　一二九
ワ之部
我が國上古に於ける開化の程度より推せば、必ず文字無かるべからず　三四
我が國に傳はれる漢魏兩晉間の字音の少き所以　二七八
我が國の周代古音と一致せる字音　二八
は、周秦の間に、東方に入りたるものなり　二六四
我が國の地名人名オク韻甲乙二類　三一
の分用　一六〇
王仁と辰孫王との事蹟の類似　二三九
王仁の祖父王狗在漢の年代　二四一

索引終

明治四十四年九月廿七日印刷
明治四十四年九月三十日發行
大正拾參歲甲子第三月廿日購

假名源流考及證本寫眞

定價金貳圓廿五錢

文部省內
編纂者　國語調査委員會

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
發行者　株式會社國定教科書共同販賣所
右代表者　大橋新太郎

東京市京橋區築地三丁目十一番地
印刷者　野村宗十郎

東京市京橋區築地二丁目十七番地
印刷所　株式會社東京築地活版製造所

東京市日本橋區新右衛門町
發行所　株式會社國定教科書共同販賣所

文部省著作權所有

國語調査委員會御編纂圖書目錄

書名	冊數	定價	郵稅
片假名平假名讀ミ書キノ難易ニ關スル實驗報告	全一冊	金貳拾五錢	金四錢
國字國語改良論說年表	全一冊	金貳拾錢	金四錢
方言採集簿	全一冊	金貳拾五錢	金六錢
音韻調査報告書	全一冊	金貳圓	金四拾五錢
音韻分布圖	全廿九枚		
現行普通文法改定案調査報告ノ一	全一冊	金貳拾五錢	金四錢
口語法調査報告書	全二冊	金貳圓	金拾六錢
口語音韻分布圖	全卅七枚	金壹圓五拾錢	金拾貳錢
漢字假名遣及假名字體沿革史料	全一冊	金八錢	金貳錢
假名源流考	全一冊	金參拾五錢	金六錢
口語體書簡文に關する調査報告	全一冊	金參圓	金拾六錢
假名源流考證本寫眞	全一冊	金四拾五錢	金八錢
假名源流考證本寫眞	帙入全二冊	金貳圓貳拾五錢	金貳拾四錢

NYODO BOOK
OTOMACHI H
TOKY
志本堂隊

57998

国立国語研究所
1001114246

NANYODO BOOK-STORE
MOTOMACHI HONGO
TOKYO
南陽堂本店

假名源流考附圖

皇漢歷代字音一斑

皇漢歷代字音一斑

凡例

○此の圖は本篇に於て論定せる周代古音と一致したる推古期遺文其の他古代の字音の、我國及び支那の古今の字音に對する異同と變遷との一斑を知らしめんが爲めに、特に本篇第四章中に擧げたる第一、第二及び第三の三類の假名の文字と共に詩經其の他周代古書に一韻として用ゐられたる文字の大略を取りて、韻鏡と對照せしめたるものなり。看者宜しく最上欄の周代韻脚と最下欄の韻鏡轉攝等を區分せる縱線とを對照して、其の中間なる歷代に於ける字音の異同を比較すべし。

○圖中○を記したるは相當せる實例を缺けるものなり。

○漢以後の韻脚は、唯一韻として用ゐられたるのみにして、中に體韻の拗直に關らざるものあるが如くなれど、其の分別不明なるが故に、姑くアの體韻として擧げたるものあり。

○各時代の韻につきては、一々詳論せざれば、遽かに解し難きもの少からず。是等は、追公にすべき周代古音考、漢魏六朝古音考等を俟ちて之を知るべし。

古代

	第一類	第二類	第三類
周 韻脚	アグ ang	ア a	オイ oi
前漢初 韻脚	アグ ang	ア a	オイ oi
前漢末 韻脚	アグ ang	イ i、ア a	イ i
後漢 韻脚	アグ ang	ア a / イ i / ウイ ui / アイ ai	イ i
後漢 梵音譯字	ア a / ア a イヤ iya / ○ / ○	イ i / ウ u / ア a / イヤ iya / ア a	イ i / ウウ uu / ア a、エ e / イ i / オ o / ウ u
魏 韻脚	アグ ang / アレグ ayeng / アグ ang	イ i / ウイ ui / アイ ai / ア a	イ i / アイ ai / イヌ in / ウウ uu
魏 梵音譯字	ア a / イヤ iya / ○ / ○ / イヤ iya	イ i / ウイ ui / アイ ai / ア a / イヤ iya / ア a	イ i / ア a エ e / イ i / ウ u / オ o / ○
宋齊梁 韻脚	アグ ang / イヤグ iyang / アレグ ayeng / ワグ wang / イヤグ iyang	イ i / ウイ ui / アイ ai / ア a	イ i / アイ ai / イヌ in / オウ ou / ウウ uu
推古期 古音	アグ ang	ア a / ○ / ○ / ○ / ○ / ア a	オイ oi / ○ / オイ oi / ○ / オイ oi / ウウ uu
推古期 假名	ア a	ア a / ○ / ウ u / イ i / エ e / ア a	オ o / イ i / エ e / オ o / エ e / ○ / オ o / ウ u
唐 梵音譯字	アグ ang ア a / イヤ iya / ○ / エイ ei / ○	イ i / ウイ wi ウ u / ア a / イヤ iya / ア a / ワ wa	イ i / イ i / ア a / エ e / ○ / オ o / ウ u
奈良朝 漢音	アグ ang / イヤグ iyang / ワグ wang / エイ ei / イヤグ iyang	イ i / ウイ ui / アイ ai / ア a / ワ wa	イ i / アイ ai / イヌ inu / オウ ou / ウウ uu / イユウ iyuu
奈良朝 吳音	アグ ang / イヤグ iyang / アグ ang / ワグ wang / イヤグ iyang / アグ ang	イ i / ウイ ui / アイ ai / ア a / イヤ iya / ア a / エ e / ワ wa	イ i / エ e / イヌ inu / オウ ou / オ o / ウ u
奈良朝 假名	アガ アギ アグ ang アゴ ア a / ワ wa / アグ ang アゴ ア a / ○ / アグ ang アゴ ア a	イ i / イ i、エ e / イ i / ウ u / ○ / エ e / ワ wa	オ o / イ i / エ e / イヌ inu / オ o / ウ u、オ o / ウ u
平安朝 漢音	アウ au / イヤウ iyau / ワウ wau / エイ ei / アウ au	イ i、エ e / ウイ ui / アイ ai / ア a / ワ wa	イ i / アイ ai / イヌ inu / オウ ou / ウ u、ウ u / イユウ iyuu
平安朝 吳音	アウ au / イヤウ iyau / アウ au / ワウ wau / イヤウ iyau	イ i、エ e / ウイ ui / アイ ai / ア a / ワ wa	イ i / アイ ai / エ e / イヌ inu / オウ ou / オ o / ウ u / イユウ iyuu
平安朝 假名	ア a / ア a / ○ / ワ wa / ○ / ○	イ i / イ i / ウイ ui / エ e / ア a / エ e / ワ wa	オ o / イ i / エ e / イヌ inu / オ o / ウ u、ウ u / ウ u
現時 日本 漢音	オー ō / ヨー yō / オー ō / エー ē	イ i / ア a / ワ wa	イ i / アイ ai / イン in / オー ō / オ o / ウ u / ユー yū
現時 日本 吳音	オー ō / ヨー yō / オー ō / ヨー yō	イ i / ア a / エ e / ワ wa	オ o / イ i / アイ ai / イン in / オー ō / オ o / ウ u / ユー yū
現時 日本 朝鮮音	アグ ang / ワグ wang / ヨグ yöng	イ i / ウイ ui / エ e / ア a / ワ wa	イ i / エ e / イヌ in / オ o / ウ u / ウ u
現時 清國 厦門音	オグ ong / イヨグ iyong / オグ ong / イエグ ieng	イ i / ウイ ui / アイ ai / オウ ou / オア oa / オウ ou	イ i / アイ ai / イヌ in / オウ ou / ウ u / イウ iu
現時 清國 北京官話	アグ ang / イアグ iang / ワグ wang / イウグ iung	イ i / ウイ ui / アイ ai / オ o / ワ wa / ヲ wo	イ i / アイ ai / イヌ in / アウ au / ウ u / イウ iu ウ u

韻鏡

攝目	宕					梗			止					蟹			臻	流		
轉次	卅一			卅二	卅四	卅三			八			六	七	十三		十四	十七	卅七		
等位	一、二、					三、		二、	二、三、四、			三、		一、二			三、	一、		二、三、四、
分韻	唐陽、蕩養、宕漾、					庚清、梗靜、諍敬勁、			支、紙、寘、			之、止、志、		脂、旨、至、		咍、皆、海、駭、代、怪、	灰、皆、賄、隊、怪、	眞、	侯、厚、候、	左、有、宥、
詩易二經及ビ楚辭等ノ押韻ニ用ヰタル文字ノ概略 字傍ーヲ記セルハ古韻ト一致セル我ガ國ノ古字音ニ實例アルモノヲ示セリ	方防雱芳魴放 亡罔芒 岡剛 綱衡 堂鏜黨 亢杭 爪 倉鶬蒼瑲 桑往 囊 湯蕩 藏喪 康	陽傷場揚楊 尙嘗常掌裳商 長粻張 涼 襄瀼穰 昌 章璋 量糧 爽 兩 貺 筐	良	仰 央殃 向 象 響 相箱 牀壯將漿 羊詳姜羌 疆 享	王皇遑煌喤 黃簧廣 光洸	觥	明盟 英	卿 兵 京景 慶 兄	行	梗 羹	奇掎倚錡椅 侈移	宜	義儀犧羲	施	皮 地馳池 離縭 詈罹 纚	陂被	隋隨 蘂 吹 爲	罷羆	加珈嘉賀駕 那 儺 佗紽 他 羅 可河何荷歌 多 我 莪峩 左墮	蛇 差磋傞	波頗 麻摩	化吪訛	戈和 禍騧 瓦
	其期 己杞忌 里理 止意疑	淇騏箕基欺僛 沚祉齒 紀起 屺 鯉裏	矣俟竢 以似耜苢治貽紿駘詒 喜饎 姬熙頤 絲茲 之蚩 寺詩時持恃侍誌 士仕 史吏 使事 耳恥 梓 子耔字李 試熾識 市 司嗣詞辭 思 釐 備	伓駓秠	否 洧	龜	偲 才哉 災 來萊 代 海 殆	能態 台臺 乃仍 耐	每鋂梅痗悔晦誨 俟涘 背 倍 醢 佩 怪 灰	敏	腜謀	母 畝	富	負 婦	尤訧肬 丘 又右祐友有囿					